

リウマチ患者を総合的診療で支える

松原メイフラワー病院



兵庫県加東市 松原メイフラワー病院 院長

松原 司 先生

松原メイフラワー病院はリウマチ性疾患のセンター機能を持った専門病院です。病院名の「メイフラワー」は、かつて17世紀に英国清教徒の一派（ピルグリム・ファーザーズ）が新天地・米国に渡った際の船の名前「メイフラワー号」に由来し、リウマチ医療の「フロンティア」をめざすという思いから名付けたといいます。同院の取り組みについて院長の松原司先生にお話を伺いました。

整形外科と内科の隔たりのない診療体制

松原メイフラワー病院は内科的治療、整形外科的治療、リハビリテーションを総合的に行うリウマチ性疾患の専門病院として1999年に開設されました。「当時、リウマチ性疾患は整形外科と内科で別々に診療されていましたが、治療においては薬による保存的治療、リハビリテーション、外科的治療が総合的に関わります。そのため、科の壁を取り払い、整形外科医、内科医が気軽にディスカッションしながら1人の患者さんを診るセンター機能を持った病院をつくりたいと考えました」と松原先生は振り返ります。

同院が扱う疾患の内訳はリウマチ性疾患が6～7割を占め、脊柱管狭窄症や骨折、変形性関節症など一般整形外科疾患が3～4割です。現在勤務する医師は整形外科に常勤3名と非常勤3名、内科に常勤2名と非常勤1名という体制で、外来ではその場でお互いにコンサルトしやすいように2つの科の診察室を隣接して配置しています。病棟回診は両科が合同で行い、定期的に合同カンファレンスも開催するなど、共同診療のための環境づくりがなされています。加えて、専門性の高いスタッフの育成にも力を入れています。公益財団法人 日本リウマチ財団の登録リウマチケア看護師、登録薬剤師、登録理学療法士、登録作業療法士が合計12名在籍し、県下で屈指の数を誇ります。職種にかかわらず、資格取得や学会発表、講演などの活動を評価し給与に反映している他、学会参加費用などへの補助制度を設けるなど、病院としてのバックアップ体制も整えられています。



■外光を室内に取り入れるための天窗。開放感のあるモダンな設計は松原先生がこだわった点です。



■リハビリテーション室。リハビリテーションは治療の一つの柱で、リウマチ性疾患に精通した理学療法士や作業療法士がそろっています。

経済性や相談支援を踏まえたリウマチ診療へ

近年、生物学的製剤の登場などで関節リウマチを取り巻く状況は変化しています。高齢者の増加に伴い発症年齢の高齢化も見られます。そうした中で治療のゴールも変わってきていると松原先生は指摘します。「寛解はほぼ達成されたので、経済性なども加味しながら、その状態をいかに長期にわたって維持し社会生活に復帰させるかをゴールに設定して治療する時代になっています。ですから、治療費用が負担になっている人には状態が安定した段階で生物学的製剤のテーパリング（減量）やスペーシング（投与間隔の延長）など、より安価に治療できる方法を検討し、患者さんのニーズに応えることが必要です」。ただ、経済的不安や治療の悩みなどを医師には話しにくいという患者さんも少なくありません。そのため同院では看護師によるリウマチ相談室を開設して、患者さんのニーズを拾い上げて治療に反映しています。

松原先生は同院をリウマチ性疾患の専門病院であると同時に、一般整形外科疾患も診る地域に根差した病院であると位置付けています。現在、病床は一般病棟のみ99床で構成されていますが、「一般整形外科疾患では高齢者が中心となるので、地域包括ケア病床を10床程度設けることも考えています」と高齢化が進む地域のニーズを見据えています。

一方、リウマチ診療では病診連携をさらに進めたいといいます。「リウマチ診療を手掛ける医療機関は以前よりも増えていますが、地域によっては非専門医が診ざるを得ないこともあります。また、合併症を持つ患者さんもいるため、かかりつけ医の先生方と医療連携を図り、半年ごと、1年ごとに当院で全身状態などをチェックすることで安全性を担保するシステムを拡充していきたいと考えています」と松原先生は話します。



■地域連携室。広いエリアから多くの患者さんが来院するため、連携する地域も広範囲にわたります。



■新型コロナウイルス対策では、できるだけ早く感染を確認することで院内感染のリスクを減らすと、院内でのPCR検査も開始しました。そのために発熱外来の専用室をつくり、室内に患者さんが待機する陰圧室も設けています。

(2020年11月取材)